

観客を意識して（6年生：狂言学習）

山口耕道先生にご指導をいただき狂言学習も3回目を迎えました。1回目は、自分のセリフをしっかり伝えることを目標に稽古をしました。2回目は、セリフに動きが加わった稽古でした。そして、3回目は、観客を意識して演じる稽古をしました。そのためには、発声はもちろんのこと、間のととり方や演じ手の目線、動き全てに注意が必要です。そして、何よりも大切なことはチームで演目を仕上げること（チームワーク）です。同じ登場人物を1の場面から2の場面へ、3、4、5・・・と、次々と演じていきます。チーム全員が観客を意識しながら同じ思いをつないでいくことが成功につながります。



《『附子』の稽古より》

観客が参加できるように演じましょう。

太郎冠者、次郎冠者のお辞儀で、間を取ることによって、主人との関係が表現できます。しっかりと間をとりますよ。



伝えようと思ったら、早口にならないように、ゆっくりと話すことを心がけましょう。

附子の重さは？持ち運ぶ時や置く時に、重さを想定して演じましょう。



「そりゃ退け。そりゃ退け。」

逃げる時は、一目散に逃げます。立ち上がったら、身をかがめて（小さくなって）逃げます。



「そりゃ退け。」を急いでいる感じが出るようにするには、その前のセリフをゆっくり言うことがポイントです。早口で言うのには限界があります。ゆえに、前のセリフをゆっくり言うことが大切です。

仰ぐところはよく練習ができています。



チャレンジしました！附子の取り合う場面を工夫しています。



《山口先生のことばです》

よく頑張っています。私は、うれしいですよ。このまま伸び伸びやってください。うれしい、うれしい。こういうふうになっていくのだな。

間を作るのは、勇気がいります。間がないと、聞いている人（観客）は、しんどいです。間を取ることで、観客に考える時間を与られます。

附子を食べる時には、音をたててもいいですよ。次郎冠者は、附子をガツガツ食べている様子を表現しましょう。



山口先生との3回目のお稽古では、観客を意識して演じるようご指導いただきました。

演目の仕上がり状況は、「ほぼ仕上がっています。」と山口先生に言葉をいただきました。

今回の稽古では、多くの児童が自分なりに表現を工夫して演じ、山口先生に評価を求めているところがよかったです。主体的に狂言学習に取り組んでいることがよくわかりました。うれしいです。

次の課題は、さらに内容を深く理解して演じることです。柿がどんなものなのか、附子とはどんなものなのか、主人が伝えた附子と附子の正体について、それぞれイメージをもって演じることが大切です。演じ手がわからないことは、観客はわかりません。子どもたちには、観客を巻き込んだ演技ができるよう、更なる努力を期待します。